

# 中国語と日本語の生産物受動文について

陸 芸娜（金沢大学大学院）

## 0. はじめに

本稿で扱う「生産物」というのは生産性動作行為（「作る」、「書く」など）によって生み出された生産物のことを指す。従来の中国語文法では賓語の位置で表現される典型的な格のひとつと認められ、賓語の区別としては結果目的語と呼ばれる。しかし、ほかの賓語（動事目的語、使役目的語、対象目的語）と本質的に違うところがある。それは「動作行為が行われる前に存在しないモノ」という意味的な特徴があることである。その意味的特徴が、結果目的語の受動形式への適用についてどんな影響を及ぼすかを明らかにするのが本稿の目的である。

## 1. 先行研究

### 1.1 陳平（1994 年）「試論漢語中三種句子成分与語義成分的配位原則」

『中国語文』商務印書館

Dowty (1991 年) を参考にしながら、受け手成分範疇は五つの特徴、即ち<sup>1</sup>①受動性、②変化性、③形成過程、④依存性、⑤静止状態性、を持っている、とする。

この五つの属性は下記のように、それぞれ説明されている。①「受動性」というのはあるものがある動作の作用またはその影響を受け取ることである。②「変化性」というのはあるものが動作の影響により、なんらかの変化を起こし、新たな状態を生み出すこと。例えば、「刮胡子」の「胡子」は「刮」という動作によって、位置が変わってしまう（顔から離れてしまう）。無論、この属性を持っている受け手は①の受動性も持っている。なぜなら、行為を受け取らなければ、その行為による変化も起こらないのである。③「形成過程」というのは最初にないものが次第に現れてくる性質。例えば、「叠紙鶴」の「紙鶴」は「叠」という動作の作用によって、「紙」から「紙鶴」に変身してしまう。「紙

<sup>1</sup> 「試論漢語中三種句子成分与語義成分的配位原則」原文の p 162 原型受事特征主要包括：1) 变化性；2) 渐成性；3) 受动性；4) 静态性；5) 附庸性。説明便宜上、順序を変え、日本語に翻訳した。

鶴」は元の存在しない状態から現れて、感知できるようなものになる。  
④依存性という属性はもっぱら結果目的語のことをいう。動作に依存している結果目的語は動作がなければ、存在しないのである。③の形成過程と関わっている属性と言える。⑤静止状態という属性の例として、陳氏は「去上海」という例を挙げた。「上海」という場所は「去」という動作によって何の変化も起こらない。

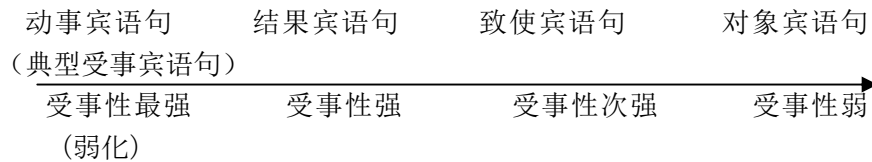
以上の考察は受け手の性質を分析することにおいて非常に大きな影響力を持った。下記の 1. 2 張雲秋 (2004 年) もこれらの 5 分類に基づいたものである。張雲秋 (2004 年) では、特に「受事性」という概念をたて、陳平 (1991 年) がまとめた受け手成分の五つの特徴を総合したものを指す。しかし、本稿では受け手目的語の再分類を行い、さらに受け手の受事性の強弱を再検討した。具体的異同については後述する。

## 1.2. 張雲秋 (2004 年)『現代漢語受事賓語句研究』 学林出版社

名詞成分の格の意味役割を分析した。その中の役割の一つとして、客体格がある。受け手になる格のことであり、客体格はさらにいろいろな種類に分けられている。その中、「動事目的語、使役目的語、結果目的語、対象目的語」が中心として考察されている。張の定義では、動事目的語、使役目的語、結果目的語が表すモノは動詞の表す行為によって変化を起こすので、「変化性」を持っている。目的語が表す物事の状態が動作の影響を受け、変化を起こしたなら、その目的語は動事目的語と判定される。例えば、「撕衣服、切萝卜、删掉细节」の下線部を動事目的語という；目的語が表す物事の属性が動作の影響を受け、変化を起こしたなら、その目的語は使役目的語と判定される。例えば、「孤立敌人、活跃气氛、坚定立场」の下線部を使役目的語と言う、それぞれ「使敌人孤立，使气氛活跃，使立场坚定」というふうに言い換えることができる；目的語が表す物事がある動作の影響により存在しない状態から感知できるようになったなら、その目的語を結果目的語という。例えば、「写字、挖洞、酿啤酒」の下線部を結果目的語対象目的語は動作の対象ではあるが、変化が起きないため、変化性を持っていない。例えば、「揣摩他的意思、测量温度、爱好音乐」の下線部を対

象目的語という。以上の4種類の目的語の受事性（『動作から影響を受ける程度の強弱』）が下記のように分析されている。

典型的受け手目的語は受事性（動作から影響を受ける程度の強弱）が強い。張は文法構造、語義条件、語用要因という三つの面から上記四種類の受け手目的語の受事性の強弱を考察した。典型範疇理論により、下記のような連続体をまとめている。



以上の論考は受け手の受事性の強弱判断や四種の受け手目的語の被字句への適応性の研究において参考にするべき価値があり、特に結果目的語の受事性の有無についての認識は大いに評価したい。

- 1.3 張雲秋（2004 年）の受事性強弱段階付けは受動文の分析に意義重大であるが、受事性強弱の連続体においては、結果目的語句の順位に疑問を感じざるを得ない。張伯江（2000 年）において、

“把”字的宾语更多地具备受事特征，这就是过去人们说“把”的作用是“提宾”的依据。但是与此同时我们也观察到，“把”字的宾语却具有两种原型施事的特征——“自立性”和“位移性”，而排斥两种受事特征——“附庸性”和“静态性”。

要約すると、「把」字句の目的語はよりたくさんの受事性を持っており、「自立性」と「移転性」を帯びるが、「付着」（動作依存性）と「静态性」は排斥される。

張伯江（2000 年）の結論により、「付着」を持つ結果目的語は「把」字句への適用が容認されにくいということが説明できる。受事性の強い目的語を要求する「把」字句が結果目的語を排斥するのは、結果目的語の受事性が低いということの裏づけになる。

張雲秋(2004 年)の連続体に疑問を投げかけるもう一つの先行研究が、

日本語の受動文研究にも存在する（1.4 を参照）。

- 1.4 日本語の受動文研究において、生産物も取り上げられている。代表的な益岡（1991 年）の研究によると、生産物を「受動者」という概念から外すべきだという。なぜなら、生産物はある動作が終わってから初めて存在するもので、その動作行為を受け、影響を被ることはない、とみなせるからである。

## 2. 問題提起及び先行研究の再検証

益岡氏の研究は日本語の受身文を取り扱っているが、生産物の扱いは中国語の分野にも生かされるべきである。張伯江（2000 年）と益岡（1991 年）の研究がヒントになり、筆者には結果目的語の受事性は張雲秋（2004 年）が付けた順位ほど高くないのではないかという問題意識が生まれた。この問題意識をもとに張雲秋の研究、とりわけ、論文中の使用用例の再検証を行う。

本稿では、張（2004 年）の使用例を再整理するにあたり、以下の方針をたてた。まず、「被字句（介詞“被”を用いた受動文）で用いられる形式は受動性が高い」と仮定したうえで、被字句を含む三つのリトマス形式<sup>2</sup>を起用し、三種類の受け手目的語の被字句への適応性を検証することにした。

「現在進行形の被字句」	正在被……、被……着
「完成形被字句」	被……了
「将来形被字句」	快要被……，将被……

動詞単独で各リトマス形式に当てはまるなら、無条件で被字句に適合性を持つと判定し、補充成分（例えば、結果補語、または文脈説明）を補ってから初めてリトマス形式に当てはまるなら、有条件で適合性を持つと判定する。

張（2004 年）の論説には 98 例の典型的な受け手目的語が挙げられ、うち動事目的語が 40 例、使役目的語が 23 例、結果目的語が 35 例。本稿のリトマス形式に対する適合可否状況は下記の[表 1]のごとくまと

---

<sup>2</sup> リトマス形式：ある文法特徴を確認するための検証形式

められる。

[表 1] 用例検証の統計結果

受身文 目的語	現在進行形		完成形		将来形	
	無条件	有条件	無条件	有条件	無条件	有条件
動事 (40)	2	1	11	22	5	14
使役 (23)	0	1	4	5	2	0
結果 (35)	0	0	0	4	0	1

上記の統計結果から見ると、動事目的語は受身文に対する適応性が他の目的語よりはるかに高い。したがって、動事目的語が典型的な受け手目的語であることは疑う余地がない。次に、使役目的語と結果目的語の適応性を再考察してみよう。張も被字句を使って目的語の受事性の強弱を検証しているが、上記の表にもとづく限りでは、使役目的語の受身文への適応性は結果目的語より強いと判定でき、この判定は張氏の結論と異なる。張氏が挙げた使役目的語と結果目的語は量が比較的少ないため、『中国語動詞用法辞典』から無作為に使役目的語 40 例と結果目的語 40 例を抽出し、同じ検証方法で統計した結果を下記の表 2 にまとめた。

表 2 「漢語動詞用法词典」

(無作為に使役目的語、結果目的語を 40 例ずつ抽出)

リトマス 目的語 形式	現在進行形		完成形		将来形	
	無条件	有条件	無条件	有条件	無条件	有条件
使役 (40)	0	0	5	2	3	2
結果 (40)	0	0	0	0	0	0

この点で、張(2004 年) の結論と異同が生じ、結果目的語の受事性を再考察する必要が明らかになった。本稿では、さらにその受事性が被字句と如何なるつながりがあるかを明らかにしていく。

### 3. 本論

### 3.1 日本語の「受動者」と中国語の「受事性」

益岡（1991 年）において、「受動者」という概念が提起されている。その「受動者」というのは動作の対象であり、受身文の主語に立つものであり、中国語における被字句の「受け手」に相当する文法概念とみなすことができる。益岡によれば、「受動者」とは、それに向かって動作がなされる場所の存在、すなわち、動作を直接受ける存在のことである。そこで例えば「臨時の休憩所を作る」では、「休憩所」は「作る」という動作の「受動者」ではなく、「作る」という動作の結果、生じる存在である、として、動作の生産物を受動者の範疇から除外している。この主張は合理的である。

本稿は益岡（1991 年）の論を生かし、中国語の生産物結果目的語に受動性の意味特徴がないとする。日本語の動作生産物が文の主語に立つときには、「に」で動作主を表すことができない、「によって」で代用しなければならないという制限がある（後文で詳しく扱うことにする）。それに対して、中国語の結果目的語は被字句に入らないという制限がある。

「受動者」という概念の範疇は大変示唆に富んだものであり、中国語の受け手目的語の受事という意味特徴を再認識する必要があると考えられる。

「変化性」は行為の前から存在するモノが行為の影響を受け、変化する性質である。結果目的語の性質として、行為事前に存在しないモノが存在しない状態から感知できるようになるという「変化」は一般的な受動者の「変化性」とは区別されるべきである。張雲秋（2004 年）のように結果目的語の「変化」性質を「変化性」に含めるのは合理的ではない。中国語の動事目的語および使役目的語は行為の前からすでに存在するもので、行為によって、受け手の身に変化が見えてくる。結果目的語が表す受け手は行為が終了するまで存在しないものと見てよい。その「変化」は存在しない状態から存在するようになり、感知できる状態になることである。動作がなければ、存在しないものである。変化性というより、むしろ陳平がまとめた「形成過程」（漸成性）、「依存性」（附庸性）の方がふさわしい。

本稿では「形成過程」（漸成性）「依存性」（附庸性）以外の意味特徴が結果目的語にあるかどうか、それを如何に記述すべきかを検討した。その結果目的語が表す生産物は動作行為が終わってから出現するものであるため、「動作と乖離している」ことを重要視すべき特徴ととらえた。動作行為

と乖離している以上、動作を受けることができず、受動性はないと言える。そして動作を受けない以上、変化性もないという結論に至ることができる。

### 3.2 「状態、過程、行為」命題三分類の仮説

中右実（1994 年）における英語の受動文に対する分析は受動文への普遍的な解釈に大いに役立つ。中右は「受動文は状態命題か過程命題のいずれかであり、決して行為命題であることはない」との結論を下している（中右 1994 年 p375）。つまり受動文には、状態受身（statal passive）か過程受身（processual passive）しかなく、行為受身（actional passive）といったものはない、という結論になる。

ここで、新たにでてきた「状態」、「過程」、「行為」という三つの命題を簡単に紹介するため、中右（1994 年）第 4 部 20.2 を下記のように要約する。

「体系的な意味役割理論の観点でみる限り、最も基本的な命題型は、状態と過程と行為であり、それらはそれぞれに固有の内部構造によって区別される。その内部構造は次のような意味役割構造の一般的スキーマとして捉えることができる

- a. 状態の命題型：BE(THING,PLACE)
- b. 過程の命題型：GO(THING,PLACE)
- c. 行為の命題型：DO(ACTOR,THING)

直観的にいえば、状態命題とは〈何がどこそこにある〉あるいは〈何がどうこうである〉という関係を表す<sup>3</sup>。過程命題とは〈なにがどうこうなる〉という関係を表す。状態変化や位置変化が含まれている。行為命題は ACTOR 〈行為者〉と THING 〈もの〉の二つの項を要求する。

〈何がどうする〉という意味関係を表し、わけでも典型的なのは〈だれかが何をする〉という関係である。行為命題は行為者の項によって特徴づけられる。」

本稿では、中右の「受身文になってからは、もはや行為ではない」という主張に賛成する。

その主張に基づき、さらに明確に受身文のメカニズムを解明するために、本稿では、中国語の被字句について、ある事象構造において、行為性と非行為性が備わり、かつ行為性が背景化し、非行為性が前景化するなら、被

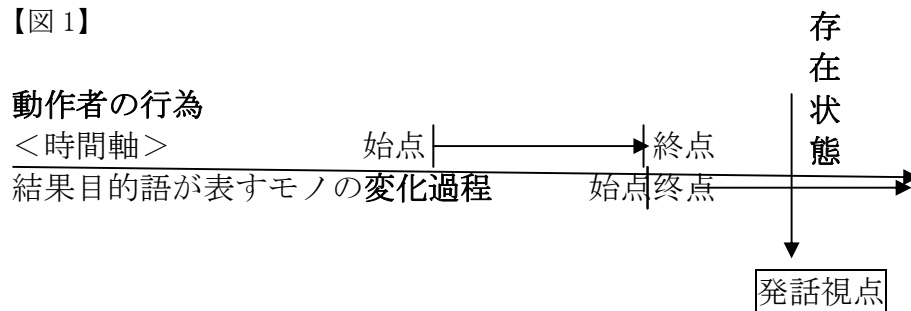
<sup>3</sup>日本語では「にある」と「である」とは役割を分担している。

字句への変換が容易になるという仮説を立てる。ここでいう「背景化」とは「言語形式化しない」というのではなく、「文の意味の焦点にならない、クローズアップされない」という意味でのものである。後文でこの仮説を検証することにする。

### 3.3 事象構造の視点による考察

生産物の「なし」から「あり」という変化が瞬間に起こることは否めない。だが、この変化は出来事全般の変化過程のなかに存在する一瞬であり、生産物自身の変化過程と捉えることはできない。瞬間とは言いながら確かに存在する、出来事全般（以下、事象構造として図解する）における変化過程を構成している。しかし、それは行為終了後に出現する。言い換えれば、この瞬間は事象構造内において行為そのものとやはり「乖離」し、変化の背景となる行為性が欠けているということである。3.2 で立てた仮説が要求する条件を満たさないため、被字句受動文への変換が難しいと予測が付く。以下は例を挙げて、仮説を検証していくが、まず仮説を事象構造として表示する（【図1】）。発話視点の位置が意味の焦点となる。

【図1】



#### 3.3.1. 「生産物+被+V+了」は成立しない

盖房子	*房子被盖了。	?家が建てられた。
叠飞机	*飞机被叠了	紙飛行機が折れた。
钻窟窿	*窟窿被钻了。	?穴が開けられた。

「盖」（建てる）という行為が完了した後の瞬間、「房子」（ハウス）は存在しない状態から感知できるようになった。無論、工事途中、建物の骨組みが見え、だんだんと完了の姿勢を見せてくれるが、ここで言及する結果



目的語は動作が完成した後の結果としてのものを指すので、その変化性は動事目的語と使役目的語とは区別すべきである；「飞机」(飛行機)は「叠」(折りたたむ)という行為が完了した後に現れるものである。その結果目的語の性質は「房子」よりも高いといえる。なぜなら、折り紙作業の途中、最終的に何が出来上がるかを予測するのは難しいのである；また「窟窿」(穴)も「钻」(打)という行為の後に現れるものである。これらの具体例を本稿がリトマス形式とした被字句を用いて検証した結果、被字句が成立しないことが分かった。

『漢語動詞用法辞典』555例の結果目的語構造は、どれも被字句への変換が容認されがたい。被字句の受け手は張伯江(2000年)の「付着」という性質を有するが、結果目的語が表すモノの依存は動事目的語や使役目的語と違って、【図1】で示したように時間軸の上ではずれ、前後関係を持つ「依存」関係である。生産物の出現する過程は行為と乖離しているため、行為が終了する後に初めて現れるものなので、動作を引き受けるとはいえない、さらに、被字句にも入れることができない。以上の考察の結果、「受動性」「変化性」という意味特徴は結果目的語にないと結論できる。

### 3.3.2 結果目的語の受動性判別：リトマス形式の追加

#### ——「～怎么了/怎么回事？」への回答

本項では、受動性の判定に役立つリトマス形式をさらに設定して、結果目的語が表すモノに受動性が認められないことを証明する。すなわち、“某事物怎么了/怎么回事？”という形式で質問を行うことができるかどうかによって、動事目的語、使役目的語と結果目的語の「変化」の本質的な違いを観察する。

〈動事目的語としての回答〉

Q: 草怎么了？ (草がどうしたの？)

A: 草被割光了。 (草が全部刈られてしまった。)

〈使役目的語としての回答〉

Q: 对方怎么了？ (先方はどうかしたの？)

A: 对方被这一招麻痹了。 (先方はこの手に油断させられた。)

〈結果目的語としての回答〉

Q 房子怎么了? (家がどうかしたの?)

A: (結果目的語) \*房子盖好了 (家が建てられた。)

しかし、“房子”を動事目的語として扱えば回答可能となる。

A: (動事目的語) 房子被拆了 (家を取り壊された。)

動事目的語や使役目的語に対して、「怎么了/是怎么回事啊」という質問形式で質問することができるが、結果目的語に対しては通用できない。無論「房子盖好了」という文自身に問題はないが、質問に対する答えにならないのである。「房子怎么了?」という質問をするには、「房子」が存在しているのが前提となる。結果目的語という事前に存在しないものについての状態変化関連の質問はできない。

結果目的語の変化状況についての質問は行為を表す動詞を入れなければならない、例えば、つぎのような挿入が必要である。

Q: 「房子盖得怎么样了?」。(家のできあがりはどんな具合?)

A: 房子盖好了。(もうできたよ。)

### 3.4 生産物受動文の成立可否に関する日本語との比較

中国語の結果目的語が表す「生産物」と日本語の「生産物」はともに受動性がないが、生産物を話題として取り上げる時、ヴォイスの面でどのような処理を行えばよいかということについてこの節で検討する。日中パラレルコーパス(CJCS)より、下記のような用例を取り出した。

(4-1) 学校はフランシスコ会によって設立された

学校是(由)方济各会创办的。

(4-2) 「哲学」という日本語は明治のはじめに西周によって造られた言葉なのである。

“哲学”这个日语词汇是明治初期西周新造的。

(4-3) 梅嶺の道は西暦七一六年に張九齡によって拓かれた。

梅岭上的道路是公元716年张九龄开凿的

日本語の生産物主語受身文の大きな特徴として「ニヨッテ」で動作主を表すことが従来から指摘されてきている。それに対して、中国語の対訳では「是(由)……的」文型が目立つ。

生産物を話題に取り上げる際、日本語の方は典型的な「ニ」受動文が使われず、中国語の方は典型的な「被」字句が使われない。両方とも、受動

文成立に関して、典型的受動文（「ニ」で動作主を表す・被字句を用いる）にはない、なんらかの制限があることは明らかである。

### 3.4.1 「ニヨッテ」と「ニ」の考察

金水敏氏は「日本語の受動文および関連する現象」において、典型的な受動文の形式「ニ」受動文について下記のように述べている。

「動詞の語彙的な制限は少ないが、〈作成〉を表す動詞には用いにくい。これは、新たに作られたものには視点をおきにくい、という言語使用上の制約から生じていると考えられる。……〈作成〉を表す動詞の動作主は専ら「によって」で表される」

〈作成〉を表す動詞はまさに本稿で扱う結果目的語を伴う生産性動詞のことを指している。」「ニヨッテ」と「ニ」で導く文の間にはどのような違いがあるのか、先行研究で確認する。

益岡（1991年）によると、「ニ」受動文が成立するには二つのケースがある。

- ①「潜在的な受影者」が存在する。
- ②所与対象の属性を叙述することを目指す。属性叙述文という。

そこで、まず益岡の結論を基準として、生産物主語の「ニ」受動文が成立するかどうか、事象構造の視点から検証する。

潜在的受影者というのは動作発生その時点で、受動文の主語となんらかの関わりがある、その動作によりなんらかの影響を受ける人物。生産物である以上、動作行為が終わってからはじめて存在するもの<sup>4</sup>で、動作発生の時点では存在しないので、誰かと関わることもない。潜在的な受影者がいるとは言えないわけである。よって、①のケースには当てはまらない。

また、坪井（2004年）によれば、属性叙述受身文は「～され（て…になった）」という意味の括弧部分を表現していない文であるというのと同じである<sup>5</sup>。作成物の出現という変化が伴う作成行為を背景化するには、後景

---

<sup>4</sup>杉本 2000

<sup>5</sup>例えば、「この論文はチョムスキーに数回引用された」という属性叙述受身文は「チョムスキーに数回引用されて、有名になった/評価が上がった。」と同じことである。詳しくは坪井（2004）を参照。

節<sup>6</sup>にするのが有力な方法である。即ち、受動形式の動詞述語を文の従属節や条件節の形「～されて」にすることである。他動性の低さと結びつく後景節に含まれることによって、二格動作主名詞句を用いる受身文の行為者は潜在したままになる。したがって、「ニ」受身文を使用することの容認性があがる。だが、作成物主語を主語にし、ニ受身文を作る際に、「…になった」部分に埋め込む内容は「出現した」、「あるようになった」という変化内容しか入らない。すなわち、生産物主語の受身文が表す変化というのはすべて「無」から「有」への変化である。(アンダーラインは本稿で付加) 下記の例文のように変化結果を言語化しても、容認度がかなり低い。

(4-4) \*梅嶺の道は西暦七一六年に張九齡に拓かれて、あるようになった。

生産物主語受動文はケース②の「ニ」が用いられる属性叙述受身文にもならないわけである。先ほどケース①にも当たらないとの結論と照り合わせ、益岡（1991 年）理論の元で、生産物主語受動文「ニ」を用いることができないという結論が得られる。

「ニ」の代わりに、「ニヨッテ」を使うと、だいぶ状況が変わる。「ニヨッテ」降格受動文においては、背景化された動作主は一般に、存在が含意されるだけで、表面には現れない。行為性を表現する動作主が背景化することによって、非行為性が増す。

生産物主語の降格受動文において、動作主は「ニヨッテ」で導かれる。動作主の存在を表すことは、動作対象についてなんらかの情報を提供していると考えられる<sup>7</sup>。すなわち、生産物の生産者という情報を表すのである。ここでいう情報は「属性叙述受動文」の「属性」は区別すべきである。「属性叙述受動文」の「属性」はあるできごとによって、事前に存在しているものになんらかの属性が付け加えられたというプロセスを経てから初めて出てきた属性。このような動的なプロセスからの「属性」である。しかし、生産物主語の受動文が提供する情報は動的なプロセスが重点ではなく、生産者は誰だという静的な情報である。

(4-5) 学校はフランシスコ会によって設立された。

<sup>6</sup> 坪井（2004 年）の用語であり、文の主節の事態が起こる前提を表現する形式。「従属節」「背景節」と、言語形式としては同じ形式を指す。

<sup>7</sup> 動作主以外のもの、例えば、動作時間や動作が行われた場所などの情報も提供される場合がある。

(4-6)「哲学」という日本語は明治のはじめに西周によって造られた言葉なのである。

(4-7) 梅嶺の道は西暦七一六年に張九齡によって拓かれた。

生産性動作と動作の生産物を一つの文で取り上げるには、もはや、動作自身にも、動作結果にも重点が置かれておらず、生産行為に関する副次的な条件や情報が文の焦点になると考えられる。上記の降格受動文は、「哲学」という日本語「道」の誕生に関して、「明治のはじめ」や「西暦七一六年」などのような時間を明示したり、生産者を明示したりするのである。「ニヨッテ」で表すのは行為性を持ち、影響を及ぼす「動作主」というよりは、生産物関連の静的な情報——「生産者」として捉えられるのである。

### 3.4.2 中国語の「是……的」構文

牧野(1996年)では、〈N是～的〉の意味構造について、同じ事態を「特徴づけ」という観点から表現したものであると述べられている。この観点を生かし、下記の例を分析することができる。

(4-8) 学校是(由)方济各会创办的

(4-9) “哲学”这个日语词汇是明治初期西周新造的

(4-10) 梅岭上的道路是公元716年张九龄开凿的

すでに行われた動作「创办」について、「創設者」に、「新造」について、「創造者」「創造時間」に、「开凿」について、「開通者」「開通時間」に最大の際立ちを与え、主語に「特徴づけ」したわけである。

牧野の「特徴づけ」という提案と益岡の「属性叙述」という概念と相似点がある。述語の種類として、状態(3.2を参照)に属するという相似点がある。が、中身は若干異なるところがある。

牧野の「特徴づけ」する対象は制限されていない。「是……的」はあらゆるものを主語引き立てることによって、その主語に関連の情報を提供することによって「特徴づけ」する。むしろ、生産物もこの「特徴づけ」という解釈によって、話題として「是……的」構文で表現できる。益岡の「属性叙述」は事前に存在しているものでなければならないという制限がある。あるものが動作行為によって、動作行為前とは違った特徴を帯びるようになった。このような制限により、生産物を「属性叙述」受身文で取り上げ

ると容認度が低いわけであり、降格受動文によって、生産物を話題に取り上げる。降格受動文は「是……的」と同じように、主語関連の情報を提供することができる。

最後に、本稿で立てた事象構造に関する仮説に戻って、再検証を行う。日本語の方を先に検証する。生産物を取り上げる時点で、すでに動作が終わっているので、行為性を前景化する「ニ」を使うことができない。よって、「ニ」の代わりに、「ニヨッテ」で動作主を表す。中国語の方も同じく、動作が終了して、背景となる行為性が欠けるため、「被」字句が適用できない。すなわち、生産物主語の受動文は、日本語も中国語も動的な出来事を叙述するのではなく、静的な情報を提供するのが焦点になる。

#### 4. 結論

1. 日本語の生産物主語の降格受動文と中国語の生産物主語文「是（由）……的」構文で検証した結果、本稿が立てた中国語被字句に関する仮説——ある事象構造において、行為性と非行為性が備えられ、行為性が後景化し、非行為性が前景化するなら、被字句への変換が容易になる——は成立するとの結論を得た。なぜなら生産物を主語に取り上げる文は、事象構造においての背景となる行為性が欠けているため、被字句への変換が制限されるからである。
2. 生産物を表す結果目的語を話題として取り上げるとき、受身文の使用が制限されている状況は日本語と中国語で次のような違いがある。日本語の場合、生産物は受動者の範疇から外される。受動文を作る際、動作主を表すには「ニ」の代わりに「ニヨッテ」が使われる。中国語の場合、生産物は受動性も変化性もない。あるのは「形成過程」（渐成性）と「付着」（附庸性）。生産物を話題に取り上げる時、「被」字句のかわりに「是（由）……的」構文によって表現する。ニヨッテ構文であろうと、「是（由）……的」構文であろうと、文の焦点は動的出来事を叙述するのではなく、主語関連の静的な情報提供である。

#### 5. 今後の課題

日本語の場合、生産物に視点をおくような文脈があれば、二受動文も使用可能になる。

例 (アトムの子) ぼく、天満博士につくられたんです。

この町はナポリオンに作られたんです。

「のだ」構文を用いた生産物「二」受動文の容認度が高くなる。

中国語の場合、「長い間の努力がようやく実った」というような文脈があれば、生産物主語の被字句の使用も容認される。

这家公司还真被他办起来了。

このような場合の「被」はもっぱら話者の「予想外」の気持ちを表している。

上記のような典型をはずれた周辺的な受動文である生産物主語受動文にも研究価値があると考えられる。今後の課題とし、さらなる考察を行っていく予定である。

## 参考文献

- 池上 嘉彦 1981 年『「する」と「なる」の言語学』大修館書店  
木村 英樹 1981 年「被動」と「結果」『日本語と中国語の対照研究第 5 号』  
杉村 博文 1981 年「被動」と「結果」拾遺『日本語と中国語の対照研究第 5 号』  
李臨定 1986 年《漢語比較変換語法》中国社会科学出版社  
C.E.ヤーホントフ著 橋本 萬太郎訳 1987 年「中国語動詞の研究」白帝社  
王硯農 1987 年『漢語動詞—結果補語搭配詞典』北京語言学院出版社  
工藤 真由美 1990 年「現代日本語の受動文」『ことばの科学 その4』  
むぎ書店  
益岡 隆志 1991 年『日本語のヴォイスと他動性』受動表現と主観性  
くろしお出版  
村木 新次郎 1992 年「日本語動詞の諸相」ひつじ書房  
李珊 1993 年『現代漢語被字句研究』北京大学出版社  
陳平 1994 年「試論漢語中三種句子成分与語義成分的配位原則」『中国語文』  
商務印書館  
中右 実 1994 年『認知意味論の原理』大修館書店  
沈阳 郑定欧 1995 年「現代汉语配价语法研」北京大学出版社  
牧野 美奈子 1996 年「"是～的"の意味と形」『人文学報』

- 1996 年第 273 号 東京都立大学人文学部  
 牧野 美奈子 1996 年 「" 是～的 " の意味再考」『中国語』20 号  
 内山書店
- 大滝 幸子 1996 年 「判断形容詞と動詞とが組み合わさった統合型の統合意義特徴の分析」『東洋文化研究所紀要』第 131 冊
- 陸俟明 1997 年 「形容詞作結果補語状況考察」『漢語学習』
- 工藤 真由美 1997 年 『アスペクト、テンス体系とテキスト』 ひつじ書房
- 柴谷 方良 1997 年 『日本語文法 体系と方法』『『迷感受身』の意味論』  
 ひつじ書房
- 鷺尾 龍一 三原 健一 1997 年 『ヴォイスとアスペクト』 研究社出版
- 中右 実 西村 義樹 1998 年 『構文と事象構造』 研究社出版
- 孟琮 等 1999 年 『漢語動詞用法词典』 商務印書館
- 张伯江「论“把”字句的句式语义」『语言研究』2000 年第 1 期（总第 38 期）  
 中国社会科学院语言研究所
- 天野 みどり 2002 年 『文の理解と意味の創造』 笠間書院
- 張 雲秋 2004 年 『現代漢語受事賓語句研究』 学林出版社
- 坪井 栄治郎 2004 年 「受影性と受身」 『認知言語学 I : 事象構造』  
 東京大学出版会
- 杉村 博文 2006 年 「汉语的被动概念」（邢福义主编《汉语被动表述问题研究新拓展》；p. 284-295；华中师范大学出版社；  
 研究発表  
<http://209.85.175.104/search?q=cache:BlwzawFiK6oJ:homewww.osaka-gaidai.ac.jp/~sugimura/image/passive%2520concept.pdf+%E6%B1%89%E8%AF%AD%E7%9A%84%E8%A2%AB%E5%8A%A8%E6%A6%82%E5%BF%B5&hl=zh-CN&ct=clnk&cd=1>）